

新聞記者体験による展示支援の提案

武田悠希^{†1}

藤代裕之^{†1}

概要：近年、博物館では来館者の理解促進やコミュニケーション活性化のために展示支援が行われているが、従来の研究では展示支援のコンセプトは重視されていない。本研究では、ニュースパークの展示意図に基づき、小学生を対象にした新聞記者体験による展示支援の提案を行う。記者メモや腕章などを用意し、来館者の展示回覧と理解促進を促したところ、変化を起こすことが出来た。紙を用いることでコストや継続性にも利点が見られた。また、展示支援に関わる職員が生まれることで、博物館職員の間でコミュニケーションが活性化するという予想外の効果もあった。

Proposal of exhibition support by newspaper reporter experience

YUKI TAKEDA^{†1}

HIROYUKI FUJISHIRO^{†1}

Abstract: Recently, museums have been supporting exhibitions to promote understanding of visitors to make communication active, but they don't regard the concept as important. In this paper, we suggest the exhibition support by the newspaper reporter experience in The News Park. This program target is elementary school student's. We prepare the newspaper reporter's memo pad and arm band and urge visitors to circulate exhibition and to understand. It caused a change in visitor behavior. And, there are the unexpected effect that communication activated among the museum staffs because the staff concerned with display support was born.

1. はじめに

近年、博物館や美術館の展示案内に携帯端末を用いて展示支援を行う動きが広がっている。東京国立博物館では「トーハクナビ」と呼ばれる、展示物の解説を聞くことができるスマートフォン向けアプリケーションが導入されている。また、複数の博物館、美術館で利用することのできる「ポケット学芸員」と呼ばれるスマートフォン向けガイドアプリも存在する[1]。

文部科学省は、「新しい時代の博物館制度の在り方」において博物館に求められる役割を『「集めて、伝える」博物館の基本的な活動に加えて、市民とともに「資料を探究」し、知の楽しみを「分かちあう」博物館文化の創造へ。』と位置付け、コミュニケーションの活性化の必要性を示したことにより、展示支援が進められている[2]。

本研究では、ニュースパーク（日本新聞博物館）[a] の展示コーナーの一つである情報の海で、来館者が展示を回覧し、内容を理解するための提案を行う。

2. 関連研究

角らは、展示のより良い理解のために、携帯端末を用いた展示ガイドシステムの提供を行った[3]。矢谷らは、携帯情報端末（PDA）を用いてパネルやVTRなどのインタラクティブ性の低い展示物に目を向ける機会の提供を行った[4]。これらの研究では、電子機器による展示支援を行うことで、来館者の行動が変化したことを明らかにしている。

しかし、電子機器は高いコストがかかるという問題、メンテナンスに関する問題などが存在しているため、石山らが、予算が少なく人の少ない小さな博物館でも運用することのできる、iPad miniを用いた展示支援を行い、来館者の展示理解へ繋げた[5]。

従来の展示支援に関する研究では、来館者の行動変容を起こす設計についてはいくつもの提案が行われているものの、展示支援のコンセプトの重要性については述べられていない。本研究では博物館の展示意図に沿った展示支援を重視し、提案を行う。

3. ニュースパークについて

ニュースパークは、日本新聞協会により「永続的な新聞文化の発展と教育への貢献」を目的に掲げて2000年に開館した。現代の情報社会と、新聞、ジャーナリズムの役割について展示されている博物館である[6]。2016年には、現代の情報社会と新聞・ジャーナリズムの役割に内容を特化したリニューアルを行い、取材ゲームをはじめ体験型展示やプログラムを取り入れた。

横浜情報文化センターの2階には、企画展示室や新聞製作体験スペースがあり、3階は常設展示室で、新聞の歴史、現代の情報量の多さ、新聞記者の仕事、新聞社の役割に関する展示が行われている。観覧のみの展示だけではなく、AR技術を用いた取材体験ゲームや、新聞配達体験ゲームができる博物館になっている。

^{†1} 法政大学
Hosei University

a) 住所：神奈川県横浜市中区日本大通 11 横浜情報文化センター

法政大学社会学部藤代研究室では、ニュースパークから、3階にある情報の海コーナーのアンケート集計の依頼を受けた。同コーナーは、情報量の多い現代で情報を見極めることの大切さを知ってもらうための展示が行われており、来館者がコーナーを見た上で、ポストイットに書き込みを行うというものであった。

しかし、2017年4月にニュースパークに行き確認したところ、来館した小学生は情報の海コーナーに立ち止まることなく、最後のコーナーにある新聞配達ゲームに向かっていった(図1)。中には、小学生が興味を示す展示もあった。情報タイムトンネルは両側に設定されたスクリーンに媒体のマークを表示することによって現代の情報量の多さを表現している展示である(図2)。小学生は、YouTubeマークに反応するだけで、現代の情報量の多さを体感してほしいという情報タイムトンネルの意図を理解していないように見受けられた。

次に、漫画や映像により、デマや嘘の情報に関する展示が行われている。最後には、映像と新聞の紙面比較で、情報を見極めることの大切さに関する展示が行われている(図3)。

しかし情報タイムトンネルでは、来館者が展示の意図理解までできていない。また、新聞配達体験ゲームは、「現代の情報化と新聞・ジャーナリズムの役割を知ってほしい」というニュースパークの目的に関係がない。上記2点より、ニュースパークが行っている展示支援がうまく機能していないことが分かった。

博物館の展示意図があるのに来館者に見られていないことが問題だと感じ、アンケートではない新たな展示を企画することで展示支援を行えるのではないかと考えた。そこで、本研究では新聞記者体験を展示支援のコンセプトとし、展示支援を行うことで来館者が展示を回覧し、内容を理解するための提案を行う。

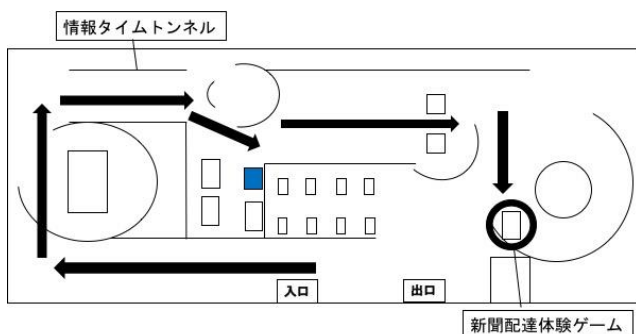


図1 ニュースパーク常設展示での小学生の行動ルート
Figure 1 Primary school student's action route in the News Park.



図2 情報タイムトンネル
Figure 2 Information time tunnel.

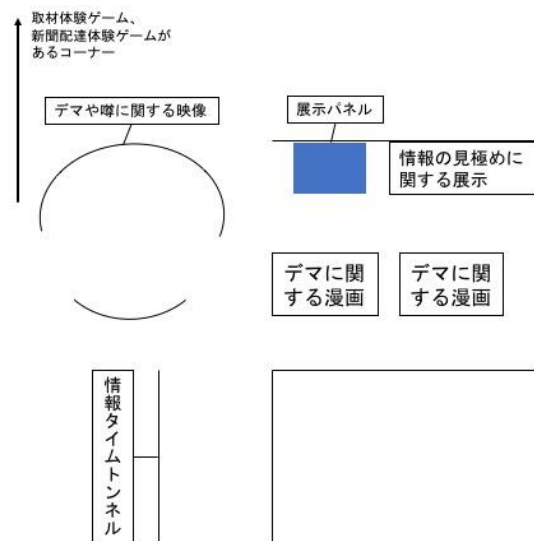


図3 情報の海コーナーの平面図
Figure 3 Plane of a sea of information corner.

4. 提案手法

4.1 提案概要

本研究では、紙による展示支援を行うことで、来館者の行動にどのような変化が起こるかを明らかにする。展示支援のコンセプトは「新聞記者になり謎を解き明かす」である。設計の狙いは2点ある。

(1) 博物館のテーマとの合致

クイズへの参加者を新聞記者と設定し、新聞社の編集長から依頼を受けて展示を取材し謎を解いていくというストーリーを設計した。新聞記者になるという部分が、新聞についての展示がされているニュースパークのテーマと合致している。実際の記者が行う取材というプロセスを、展示パネル、記者メモを用いたクイズにより行えるのではないかと考えた。

(2) 来館者が展示に目を向けるための工夫

来館者が展示物に目を向けていないという課題解決のため、「新聞記者になって情報の海の謎を解き明かせ！」

展示支援により、来館者が展示に目を向け、情報の海
コーナーを動くという仮説を立てた。

記者体験の流れ（図4）は以下の通りである.

記者メモに記載されている展示を観察すると解くことのできる問題を解く。

そしてクイズを解き終え、受付へ行くと、記者メモのクイズの答えと解説が記載された号外新聞（図 8）をもらうことができる。

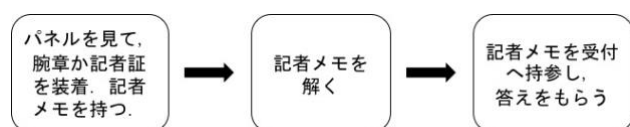


Figure 4 Flow of reporter experience.

展示パネル（図 5）は約 1.5m×約 1.5m の大きさで用意した。情報の海コーナーの入り口である情報タイムトンネルから見て、目を引くように文字の大きさ・色使い・イラストを工夫した。



Figure 5 Exhibition panel.

記者が行う取材のプロセスを再現するために、記者メモ（図 6）の作成を行った。現職の記者に、取材の際にどのようなメモを用いるかを取材し、縦開きタイプ・A5 サイズという 2 点を参考に制作した。問題数は 3 問で、穴埋め問題を 2 問、記述問題を 1 問作成した。

1. 問題の難易度を3段階に分ける
 - ①展示を見ればすぐに解くことのできる問題(依頼1)
 - ②展示を観察し、自分で考える問題(依頼2)
 - ③展示内容を理解すると解くことのできる問題友人や周りの人と相談しながら解く問題(依頼3)以上の3段階に分け、問題ごとに難易度を上げていった。

情報の海コーナーの展示には、「情報量の多い現代で情報を見極めることの大切さを知ってほしい」という意図がある。記者メモでは、このような意図を来館者に理解してもらうために、コーナーの展示順に沿った問題の作成を行った。

依頼 1 では、情報量が多くなってきていることが分かる問題を出題する。依頼 2 では、情報量の増加によりデマや嘘の情報が増え、惑わされやすくなっているということが分かる問題を出題する。依頼 3 では、情報を見極めることの重要性が分かる問題を出題する。以上、3 段階に分けてクイズを作成した。

ニュースパーク新聞社

記者MEMO



氏名

表紙

依頼 1

我々が当たり前に使っているスマートフォンが故障したは列年か。

情報の海のトンネルを突き抜けてつきとめてほしい。

□

□

□

□

年

①情報量の多さ

依頼 2

恒年会費がつかぬるかもー。
血液が足りないかもー。
大抵費がくるかもー。
スマホの通信速度がはやくないー。

これらのスマホは「うわさ」によって広がった。
うわさは広がったまっかつかをつきとめてほしい。
信用金庫と大抵費の特に注。2文字の漢字が入るぞ。

マンガに裏面の方年となることが書いてあるらしいぞ。

信用金庫

□

□

血液

□

□

ル

スマホ

□

イ

□

□

□

依頼 3

情報の海の中心
そんなのいらない。ようかいばいばい
「統合喪失」「真像大崩壊」に
隣りて真像探検のニュースが来るらしい。

①2つのニュースのちのちの注ごこ。
②2つのニュースがらうの注ごこ。

以上。2つのナゾを解いてくれ。
ナゾをとくのが夢見れば、真実と虚構にヒントを
くれるらしいぞ。まわりの友人に聞くのも
オスス。

①

②

③情報を見極めることの重要性

Figure 6 Reporter's note.

4.5 腕章・記者証の設計

新聞記者であることを再現するために、腕章と記者証(図7)の作成を行った。腕章か記者証のどちらか好きな方を装着してもらう。

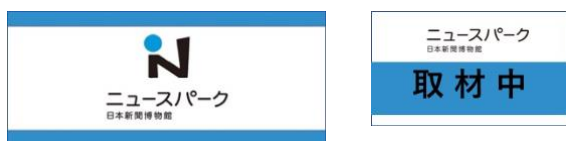


図7 腕章・記者証

Figure 7 Armband・A press certificate.

4.6 号外新聞の設計

クイズを解き終わった記者メモを、ニュースパークの受付に持参すると、受け取ることでできる記者メモの答えと解説が記載された号外新聞(図8)の作成を行った。号外新聞には、クイズの答えと解説が記載されている。

実際の号外新聞を参考に、見出しや枠組みを作成し、文章は小学生でも分かる平易な言葉を用いた。

クイズの答えと、問題に関連した展示の解説も入れることで展示への理解を支援するようにした。また、情報の海コーナーのメインテーマである「情報量の多い現代で情報を見極めることの大切さ」を伝えるために、号外新聞の一番大きい枠では情報の見極め方についての解説を取り上げた。



図8 号外新聞

Figure 8 Extra edition newspaper.

5. 調査

3節で述べたように、ニュースパークの情報の海コーナーで行っている展示支援を観察していく。

5.1 調査概要

調査は2017年12月19日、12月21日の2日間、ニュースパークの情報の海コーナーにて行った。小学5年生の男女116人と大人3人を対象に、クイズ参加者の行動観察と、インタビューを行った。

また、ニュースパーク職員にもインタビューを行い、情報の海コーナーでの人の動きや展示状況について話を伺った。

5.2 調査手法

1. 参加者の行動観察

行動観察をすることで、来館者の動きにどのような変化が起こるのかを明らかにする。参加者を目視で観察し、以下5つの項目を調査した。

- 人数
- 年齢、性別
- 情報の海コーナーへの滞在時間
- 情報の海コーナー内をどのように行動しているか
- 何人で参加しているか

2. 参加者へのインタビュー

来館者が動いた理由が展示支援によるものなのか、参加者へのインタビューから確認を行う。クイズ参加者に終わる際に声をかけ、口頭で以下5項目のインタビューを行った。

- 展示パネルは目に入ったか
- 記者メモ無しでも情報の海コーナーの展示を見たか
- 情報の海コーナーの展示ではどのようなことが言われていたか
- 記者メモを読んで、どこの展示に答えがあるか分かったか
- 参加にあたっての感想

3. ニュースパーク職員へのインタビュー

普段の展示状況を我々は把握していないため、参加者の様子を詳しく知っているニュースパーク職員に展示状況に関するインタビューを行った。

- 展示支援を行う際の人の動きに関して
- 展示支援の状況
- 受付での対応状況

5.3 調査結果

調査手法に基づいて調査を行い、以下の結果が得られた。

1. 参加者の行動観察

- 調査人数(表1)

表1 調査人数

Table 1 Number of researchers.

情報の海コーナーに訪れなかった人	38人
展示パネルに立ち止まったがクイズに参加しなかった人	16人
展示パネルに立ち止まり記者メモだけもらった人	5人
クイズに参加した人	60人
総数	119人

- 年齢、性別

小学5年生が116人（男女半々）

50代の人が3人（女性2人、男性1人）

- 情報の海コーナーへの滞在時間

滞在時間は10分程度だった。参加者はクイズの1問目から取り組み始め、どこに展示に答えがあるかを探していたが、3問目を考える時間が長かった。

- 情報の海コーナー内をどのように行動しているか

クイズに参加しない人、記者メモだけもらった人、クイズに参加する人、どの人も最後のコーナーで取材体験ゲームを行った後に情報の海コーナーに来た。ほとんどの人が問1の問題文に書かれている情報タイムトンネルから見て回っていた（図9）。「情報の海のトンネル」と記者メモに記載されているが、それがどこを指すのか分からず迷っている人も見受けられた。また、大人も展示パネルに立ち止まり記者メモを手に取り問題を見たが、解かずに去る姿が見られた。

参加者の会話を聞くと、「面白いからやりなよ」「これやってる？」といった他人に勧める行為が見られ、実際に誘いを受けて参加する人がいた。

- 何人で参加しているか

3、4人のグループ単位で行動しており、相談や答えを教えあいながらクイズを解いていた。

- その他気がついたこと

腕章・記者証を装着して参加する人は見られなかった。

1日目の12月19日は立ち止まった人が40人中8人と少なく、残りの人は新聞配達ゲーム体験のできる最後のコーナー付近に留まっていた。

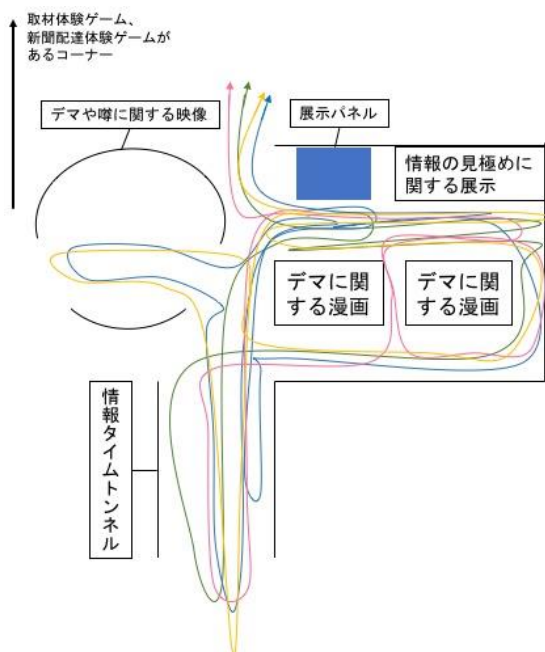


図9 行動ルート

Figure9 Action route.

2. 参加者へインタビュー

- 調査人数

小学5年生13人（3人グループが1組、5人グループが2組）

- 記者メモは展示を見るのに役に立ったか

「うん」

「多分」

- 展示パネルは目に入ったか

「見た」

「謎解きって書いてあって面白そうだなって思った」

- 記者メモ無しでも情報の海コーナーの展示を見たか

「なかったら見なかったと思う」

「見なかったと思う。そんなに文字読まなかった」

「見ないと思う」

- 情報の海コーナーの展示ではどのようなことが言われていたか

「スマートフォンが2007年に登場したのは知らなかった」

「デマは電話、ツイッターから生まれた。新聞記事は東海大相模が優勝で、仙台育英が準優勝ということを書いていた」

- 記者メモを読んで、どこに展示に答えがあるか分かったか

「職員のおじさんに情報の海がどこなのか聞くまで分からなかった」

「トンネルと、漫画を回すやつと、展示パネルの横」

- 参加してみても感想

「ちゃんと展示を読んだ」

「3問目が難しかった」

「面白かった」

「楽しかった」

3. ニュースパーク職員へのインタビュー

- 展示支援を行う際の人の動きに関して

- ・小学校の教員がニュースパークの下見時に、館内見学时に記者メモを持たせることを勧めている。興味を持った小学校には記者メモを来館時に全員配布し、館内見学时に解く時間を与えている。答えの書かれた号外新聞は教員に1枚配布し、後で小学生に配布してもらうようにしている。
- ・ニュースパークが行っている小学校の教員へのアンケートに「記者メモを解くことで子供たちは展示をよく見るようになるので続けてほしい」と記載があった。

- ・小学校単位で来館する際に、小学校教員が生徒に対し、常設展示のある3階に上がるエスカレーターの前で、新聞記者になって取材しようと声かけを行い、事前に記者メモの配布を行う小学校などもある。

- 展示支援の状況

- ・記者メモの配布数:6月27日~12月20日の間で5,580部。

- ・業者に頼み記者メモの作成を行っていたが、コストがか

かるためニュースパークのボランティアで作成するようになった。最近では、「記者メモはどのくらい必要なのか」とボランティアから自発的に声かけが行われ、進んで作成が行われている。

● 受付での対応状況

受付で号外新聞を配布する際に、情報の海コーナーの展示意図を説明するようにしている。

5.4 まとめ

参加者の行動観察より、来館者が展示に目を向けていたことが明らかになった。参加者へのインタビュー（5.3 節）での、展示パネルは見たかという質問に対し「謎解きって書いてあって面白そうだなって思った」という回答が得られた点、記者メモ無しでも展示を見たかという質問に対し「なかったら見なかったと思う」という回答が得られた点から、来館者が動いた理由が制作物（展示パネル・記者メモ）によるものであることが明らかになった。

一方で、ニュースパーク職員から、小学生は問題解くに集中してしまっているため、情報の海の展示の意図まで理解できていないのではないかという指摘もあった。

5.5 考察

参加者の行動観察で、記者メモを持って情報タイムトンネルから見て回っていたことや、他人に参加することを勧めることなどより、展示支援を行うことで来館者が展示に目を向けることが明らかになった。

しかし、参加者への「情報の海コーナーの展示でどのようなことが言われているのか」という質問に対しての回答（5.3 節）から分かるように、参加者は展示意図まで理解できておらず、断片的に展示を見ているようだった。

また、当初我々が想定していなかった効果が生まれたこともニュースパーク職員へのインタビューで見られた。記者メモの作成をニュースパークに任せることで、職員の間でコミュニケーションが生まれた。小学生にニュースパークの展示をしっかりと見てもらいたいという思いを持っている小学校教員がいる学校は、事前に記者メモの配布を行うなどして展示を見るきっかけづくりを行っており、我々の展示支援が役立っていた。

展示支援を行うことで人が動くという仮説は、小学生へのインタビューをした際に得られた、「謎解きって書いてあって面白そうだなって思った」「なかったら見なかった」などの回答から展示支援を行うことで人が動くことが分かった。

6. おわりに

本研究では、博物館の展示物に関するクイズを作成し展示支援を行い、それによる来館者の行動の変化を調査した。その結果、展示支援を行うことで来館者は展示に目を向けるようになることが確認された。「新聞記者になって情報の

海の謎を解き明かせ！」というメインターゲットである小学生が興味を持ちそうな制作物の設計を行うことで、人が情報の海コーナー内を見て回るといった行動変化が起こった。

しかしながら、今回の課題が2点挙げられる。

・参加者は展示に目を向けるが、展示意図の理解までできていない

・参加者を小学生と想定して制作物を設計したため、大人は参加せず素通りしてしまう

今後は、対象者を小学生だけでなく大人にも興味を持ってもらえ、展示の意図理解につながる展示支援を行い、来館者の行動変容を明らかにしていく。

参考文献

- [1] 『朝日新聞』2017年8月4日付、確認(最終閲覧日 2017-12-25)
- [2] “博物館の教育機能に関する調査研究報告書”.
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/kenshu/museum_educator_01/pdf/kougi2.pdf, (参照 2017-12-25).
- [3] 角康之, 江谷為之, シドニーフェルス, ニコラシモネ, 小林薫, 間瀬健二. C-MAP:Context-aware な展示ガイドシステムの試作, 情報処理学会論文誌, Vol. 39, p. 2866-2878, 1998.
- [4] 矢谷浩司, 大沼真弓, 服部亜珠沙, 杉本雅則, 楠房子. Musex:博物館における PDA を用いた学習支援システム, 電子情報通信学会論文誌, p.10-15, 2003.
- [5] 石山琢子, 楠房子, 稲垣成哲. 博物館支援コンテンツの UI と評価, 情報処理学会, pp.1-5, 2013.
- [6] “ニュースパーク（新聞博物館）が7月20日に再開館”.
http://www.pressnet.or.jp/news/headline/160719_10271.html, (参照 2017-12-25).